



中部支部

若手育成の試み

鈴木 徹

ある研究分野の将来性は、その分野に、いかに多くの若い人材を呼び込むことができるかにかかっている。若い人が溢れていた30年ぐらい前と違って、18歳人口が減少している現在では、いかに優れた研究者がいたとしても、それだけでは人は集まってこない。若手の育成という言葉をもう一度よく考え直す必要がある。とはいっても、なかなかうまく手が思いつかない。学会あるいは各支部においてさまざまな取り組みが試されていようである。中部支部においても、若手の育成についてさまざまなトライアルをしている。最近の取り組みの中から私が参加したものを中心に紹介する。

2010 度中部支部例会

中部支部では、これまで支部例会を行ってこなかった。今年度から、著名な先生方をお招きした講演に加え、ポスドクやドクターコースの学生の研究発表の場として、新たに支部例会を行うこととした。今年度の内容は以下のとおりである。

日時：2010年8月2日（月）13：00～19：00

場所：名古屋大学ベンチャービジネスラボラトリー

基調講演：関口順一（信州大学大学院総合工学系研究科）

「枯草菌細胞壁溶解酵素群の多様な役割」

招待講演：堀 克敏（名古屋工業大学大学院工学系研究科）「バクテリオナノファイバーによる非特異的付着と工学利用」/寺田 聡（福井大学大学院工学研究科）「福井産の天然物の細胞培養への展開」

若手講演：博士課程の学生、ポスドクによる約20分間の発表。今回は、7名のエントリーがあった。

今回の参加者は、一般30名、学生41名で、中部支部としてはかなりの盛会であった。できればこれからも毎年開催していきたい。中部支部で、生物工学に関わる研究室にいる博士課程の学生は、卒業するまでに必ず一度発表するような会にしたいと考えている。次年度からは、ベストプレゼンテーションなどの賞を授与することを検討している。

高校生を対象にしたシンポジウム

高校生が、この分野を目指して各々の大学を受験することを決断するには、研究の面白さを伝えることもさることながら、この分野に進んだ場合どんな将来があるの



9月11日シンポジウム会場にて

か、どんな人生設計になるのか？というロードモデルがイメージできることが大変重要だろう。研究者というのは、一般の人にとって非常に不可解な人生を送っているかもしれないのだから…。そこで今回は、生物工学に興味がある高校生に向けたキャリアパスセミナーを行ってみたい。

日時：2010年9月11日（土）13：00～17：00

場所：河合塾岐阜校

タイトル：「バイオテクノロジーを目指す人へ」

講演：臺 誠（カルピス）「発酵乳の可能性—日本発のカルピスを例に一」/朱 政治（太陽化学）「機能性食品—緑茶と健康—」/長野宏子（岐阜大学教育学部）「人々の知恵の結晶—発酵食品の魅力を探る—」/内田昭二（安城農林高校）「バイオテクを学ぶ＝日々の活力」/山田博子（コンティグ・アイ）「バイオテクを仕事にする、ということ」。

高校生20人、大学生17名、一般17人の参加が得られた。

講演の後、パネルディスカッションを行った。今回の企画は、河合塾岐阜校に会場を提供していただいただけでなく、各学校の行事日程などについて、こと細かなアドバイスをいただいた。

これ以外に、2010年7月31日（土）に、富山県立大学のプレダ・ヴィンチ祭において、「つくろう！ バイオディーゼル」と題して、中学・高校生を対象にした実験講座を開催した。

地方都市で、一般市民や高校生に向けた企画を打つことは、大きな労力がかかるのに対して参加者が集まりにくいことが大きな問題である。実験講座のために資金を使い大変な準備をしたり、高名な先生を講師に招いても、必ずしも人が集まらなかったりする。

こういった、努力を有効に活かすために、現在TV会議システムを用いた講演会の中継を検討している。たとえば、名古屋、上田、富山といった複数箇所を結んで講演会の中継するのである。あるいは、実験講座をいくつかの大学や高校で同時に行い、お互いをビデオ会議でつなぐというのはどうだろう。実は、ノートPCとプロジェクタとハンディカム程度の機器とインターネットを使えば簡単に実現可能である。来年は、こんな挑戦をしてみようと考えている。